

—

絶対無の自覚といへば、絶対に無なるものが如何にして自覚するかなど云はれるかも知れぬが、私の絶対無といふのは単に何物もないといふ意味ではない。我々の自覚といふのは自己が自己に於て見るといふことである、而も自己として何物かが見られるかぎり、それは真の自己ではない、自己自身が見られなくなる時、即ち無にして自己自身を限定すると考へられる時、真の自己を見るのである、即ち真に自覚するのである。かゝる意味に於て絶対に無にして自己自身を限定するのを絶対無の自覚といふのである、そこに我々は真の自己を見るのである。併し斯く云ふも、絶対無の自覚といふのは我々の自覚的限定を超越的立場にまで進めることによつて考へられた形而上学的意識といふ如きものを意味するのではないことは云ふまでもなく、単に我々の自覚的限定の極限といふ如きものでもない。又それは自己自身を失ふことによつて得られる宗教的体験として知識成立と何等の交渉なきものでもない。我々は自己といふものをいつも知的対象に即して考へて居る、内部知覚的自己といふのは斯くして考へられたものである。かゝる考を基として自覚の極限といふものを考へれば、自己として見られるものがなくなると云ふ時、もはやそれ以上に自覚的自己といふ如き略のを考へることはできないであらう。自己として見られるものがなくなると共に意識の意義も失はれると考へられるであらう、見られない自己の自己限定といふ如きは形而上学的とも考へられるであらう。併し我々の自己といふのは単に対象的限定に即して考へられるのではなく、対象的限定を包むと考へられる所に意識の意味があるのである。所謂内部知覚的自己といへども、単に知的対象に即して考へられるのではなく、事実を包むと考へられる所に自己の意味があるのである。それに行為的自己のノエシ的限定の意義を極小としたものでなければならぬ、その根柢に無にして自己自身を限定する自由の意味がなければならぬ。内部知覚的自己といふものが単に知的対象に即して考へられるものとするならば、却つて之を越える所に意識の意味があるのである。所謂内部知覚的自己と考へられるものは無にして自己自身を限定する自己のノエマ的限定の極限に即して考へられた知的自己たるに過ぎない。意識の意味はそのノエシ的限定の方にあるのである、ノエシ的限定の意義が深くなればなる程、自覚の意味が深まるのである、我々は意志的体験に於て最も深い自覚を有つのである。対象的限定に沿うて反省的に自己とい

ふものを考へ、かゝる自己の自己限定として意識といふものを考へれば、そこに一種の極限といふ如きものが考へられるであらう。併し私の絶対無の自覚といふのはかゝる意味に於て考へられる意識の極限といふ如きものではない、却つてかゝる意識的限定を成立せしめるものである。斯く云へば、さういふ意識以前の意識といふ如きものは単なる宗教的体験として我々の知識と何等の交渉なきものとも考へられるであらう。無論、絶対無のノエシ的限定といふのは超知識的と云ひ得るであらう、併し我々の知識と考へるものは絶対無のノエマ的自覚の内容として成立するのである。そのノエシ的方向に反省的知識といふものが成立し、そのノエマ的方向に所謂対象的知識といふものが成立するのである。デカルトの如く自覚の事実に基づいて客観的知識が成立すると考へることもできるであらう。

我々は通常素朴的に内部知覚に即して我々の自己といふものを考へ、内部知覚の範囲に属するかぎり意識せられると考へ、之を越えれば意識を超越すると考へて居る。内部知覚に於ては自己が自己自身の出来事を知り、知るものと知られるものとが一として、その底に自己自身を知る自覚的自己といふものが考へられるのである。併し内部知覚と考へられるものには一種の感官の意味がなければならぬ。我々は外的感官によつて外的事実を知覚すると考へる如く内的感官によつて内的事実を知覚すると考へるのである。而して感官的に知ると考へられるには、いつも非合理的なるものの合理化の意味がなければならない、外的なるものを内的となす意味がなければならない。知られたものと考へられるものは、何等かの意味に於て合理化せられたものでなければならない、論理的意義を有つたものでなければならない、少くもかゝる可能性を有つたものでなければならない。意識が志向的と考へられるのも、その内容がロゴス的なることを意味すると考へることもできる。無論単に合理的といふことは意識といふことを意味せないであらう。ノエシ的といふ意味では意識は非合理的でなければならない、ノエシの底には非合理的なるものがなければならない。而して斯く意識がその底に於て非合理的なるものに触れる所が感官的と考へられるのである。すべて感官的と考へられるものは斯く考へられねばならぬのであるが、内的感官と考へられるものはかゝる合理化の尖端に於て考へられるのである。非合理的なるものが即合理的であり、合理的なるものが即非合理的と考へられる所に、内的感官といふものが考へられるのである。之に反し非合理的なるものが合理的なるものを包むと考へられる所に、外的感官といふものが考へられるのである。我々の内部知覚的自己と考へられるものはかゝる内的感官に即して考へられるものであるが、単に合理的なるものと非合理的なるものとの合一と云つてしまへば、そこに内もなく外もなく従つて自己と考へらるべきものもない。自己といふものが考へられるには、内が外を包むといふことがなければならない、合理的なるものが非合理的なるものを包むといふことがなければならない。之を単に非合理的にして自己自身を合理化す

るものと云へば、それは尚外的なるものとして自己ではなくなる、自己とは自己自身の内に非合理的に自己を限定するものでなければならぬ。通常、無造作に反省によつて自己といふものが考へられると考へられるのであるが、反省によつてかゝる自己が考へられると云ふかぎり、我々の思惟の中にその可能性が含まれて居なければならない。何等かの意味に於て合理的と考へられるものは一般者の自己限定の内容として考へられるものでなければならない。一般者そのものが抽象的であり、限定せられたものである時、その限定は単に合理的と云つてよいが、個物的なるものを限定する具体的一般者に至つては、自己自身に非合理性を含むと考へられねばならない。単に個物を包む一般者と考へられるものは尚限定せられた一般者の意味を脱せないが、更に事実そのものを限定する一般者といふべきものは真に非合理的にして自己自身を合理化すると云はねばならない。而して我々の客観的知識と考へられるものはかゝる一般者の自己限定として成立するのである。かゝる一般者に於ては、もはや所謂主語的なるものは成立せない、述語的なるものが即主語となり主語的なるものが即述語となる、既に超越的述語面即ち私の所謂場所が直接に自己自身を限定すると云ふことができる。客観的知識と考へられるものは場所自身の自己限定によつて成立すると云ひ得るのである。而して斯く一般者自身が限定することのできないものと考へられた時、そこには既に限定するものなくして自己自身を限定する意味がなければならぬであらう。非合理的なるものの合理化といふには、既に無にして有を限定するの意味がなければならぬ。非合理的なるものの知識として事後的判断と考へられるものはかゝる限定の意味に於て成立するのである。併し判断的一般者の場所の直接なる自己限定として事後的なるものが考へられる時、既に無にして自己自身を限定する意味がなければならぬとしても、それは尚考へられた無、限定せられた無の自己限定であつて、真の無の自己限定ではない、見られた無の自己限定であつて、見る無の自己限定ではない。従つて非合理的なるものを包むと云ひ得るかも知らぬが、合理的にして非合理的なるものを包むとは云ひ得ない、内にして外を包むとは云はれない。唯上に云つた如き内に事実を包み、事後的に自己自身を限定すると考へられる内部知覚的自己といふ如きものに至つて、始めて斯く云ひ得るのである、即ち自己に於て自己を非合理的に限定することによつて合理化すると云ふことができる。是に於て場所が場所として自己自身を限定するのである、真に無が無自身を限定すると云ふことができるのである。我々の判断的知識と考へるものは自覚的限定によつて成立するのである、知識の底にはいつでも自覚の意義がなければならぬ。而して場所が場所として自己自身を限定するといふことは直観といふことでなければならぬ。我々が判断と考へるものは一般者の媒介的自己限定であり、一般者そのものが無媒介的に直接に自己自身を限定するといふことは直観といふことでなければならぬ、知識の根柢には直観といふものがなければならぬので

ある。而も直観といふことは勝義に於て非合理的なるものの合理化を意味するのである、真の直観といふのは対象が自己の内に没入することを意味するのである、外が内の中に没することを云ふのである。而して我々の感覚と考へられるものもかゝる意味を有つたものでなければならない。感覚といへども上に云つた如く非合理的なるものの合理化の意味がなければならない、我々の自己と考へられるものがいつも感覚に即して考へられる所以である。自己は思惟に即して考へられると云はれるが、自己は思惟の思惟に即して考へられるのである、そこには一種の直観の意味がなければならない。我々の自己はメーン・ドゥ・ピランの云ふ如き能働的感覚に即して考へられるのである。習慣によつて益々明となるといふ能働的感覚といふ如きものに於ては既に自己が含まれてゐなければならぬ。それでアリストテレスの云ふ如きヒポケーメノンとして判断の基礎となる感覚的なるものはメーン・ドゥ・ピランの所謂能働的感覚の中に含まれた自己といふ如きものと云ふことができる。私が今庭園に於て鳥が鳴くといふ時、私の知覚は自己自身を限定する自覚的意義を有することによつて自己自身を言表するのである、即ち場所自身の自己限定の意義を有するを以てかゝる判断が成立するのである。判断的限定に於てヒポケーメノンと考へられるものは自覚的限定に於て感覚的と考へられるものでなければならぬ。逆に非合理的なるものの合理化として感官的なるものがヒポケーメノンとなり、之によつて判断的知識が成立すると云ふことができる。自己に於て自己を非合理的に限定することによつて自己自身を合理化するといふ自覚的限定の立場から云へば、判断的一般者の自己限定といふのはかゝる自覚的限定の一面といふべく、合理化と考へられるものは自己が自己に於て自己を映す過程に過ぎない。自己が自己に於て無限に自己自身の影を映すといふことが非合理的に自己自身を限定することであり、即ち感官的に自己自身を見ることであつて、映されたものが自己自身であるかぎり合理的と考へられるのである。事実が事実自身を限定するといふ如く非合理的なるものの合理化といふことは固、見られない一般者の自己限定といふことであり、無にして自己自身を限定するもののノエマ的自覚の意義を有するものとして、所謂一般者とは見られない自己といふべく、之に反し非合理的なるものの合理化に於て無が無自身を限定し、自己が自己を見る、即ち感官的直観の意味に於て、自己とは見られた一般者といふべく、自覚とは一般者が一般者自身を見ると云ふことができる。従つて我々の自覚といふものを無にして自己自身を限定すると考へる時、そのノエマ的方向に無限の限定が考へられると共に、そのノエシス的方向に無限の限定が考へられねばならぬ、即ち非合理的なるものの合理化と考へられる感官的直観を中心として、その両方向に無限の限定が考へられねばならないのである。而も自覚に於て無が無自身を見るといふ意味に於て、非合理的なるものが即合理的であり、内が外を包むと考へられる点に於て事実即して内部知覚といふものが考へられるのである。内部知

覚的自己といふものが無にして自己自身を見るものとしてそのノエシ的限定の底に無限の直観が考へられると共に、そのノエマ的限定の方向に無限なる対象的限定として判断的一般者の自己限定といふものが考へられるのである。外的感官と考へられるものに於ても、我々は非合理的なるものを合理化すると考へねばならぬ、外的感官と考へられるものもかういふ意味に於て一種の自己といふことができる。併し外的感官といふものに於ては、非合理的なるものが合理的なるものを限定するのである、所謂外が内を限定するのである。之に反し非合理的なるものが即合理的であり、外が即内であると考へられる時、否後者が前者を包むと考へられる時、内部知覚といふものが考へられる。内部知覚に於ては非合理的なるものが即合理的と見られるのである、外がすぐ内と見られるのである、物が即自己と見られるのである。故に此点に於て内的事実即外的事実、外的事実即内的事実と考へられるのである。かういふ意味に於ては内部知覚と考へられるものには、感官的といふよりも寧ろ行為の意義がなければならぬ、我々の自己が表現に即して考へられる所以である。真に我々の内と考へられるものは無にして見る表現の内容といふべく、所謂意識内容と考へられるものは却つて考へられたものとして外と云ふことができる。客観を包むものは所謂意識の立場ではなくして、行為の立場でなければならぬ。所謂意識内容といふのは身体といふ一つの物体を中軸として限定せられた表現の内容でなければならぬ。我々が一般者の自己限定として合理的と考へるものは、自己自身を見るといふことを失つた表現的自己の自覚的内容と云ふことが出来る。

以上述べた所によつて、私は大体に於て我々の自己と考へるものが如何なるものであり、従つて我々の意識と考へられるものが如何なるものなるかを示し得たと思ふ。我々の自己と考へられるものは何処までも感官的なるものに即して考へられるものでなければならぬ、感官的限定といふのは非合理的なるものの合理化を意味するのである。普通には思惟に即して自己といふものが考へられると考へられるが、自己は単なる思惟に即して考へられるのではなく、思惟の思惟といふ如き一種の直覚に即して考へられるのである。而もかゝる意味に於ける直覚は非A口理的限定とムロ理的限定との両尖端の結合点として、非合理的なるものの合理化の中軸と考へべきものなるを以て、之に即して勝義に於ける自己といふものが考へられるのである。翻つて考へれば、それによつて知識が成立するといふ目バ体的一般者の自己限定と考へられるものは固、非合理的なるものの合理化といふことを意味するものでなければならぬ。真に自己自身を限定する一般者といふべきものは我々の自己そのものでなければならぬ、而してそれは直覚的なものでなければならぬ、私が場所そのものの直接なる自己限定を自覚と考へる所以である。右の如く我々の自己が感官的な

るものに即して考へられるとするならば、我々の真の自己といふべきものは暗い世界に於てあるのではなく、明い世界に於てあるものでなければならない、フェヒネルの所謂昼の世界に於てあるものでなければならない。感官に直接する外の世界と考へられるものが内の世界であり、考へられた自己の世界といふ如きものは却つて外の世界でなければならぬ。非合理的なるものの合理化が感官的と考へられ、かゝる感官的限定の極限に於て非合理的なるものが即合理的と考へられる所に、外が即内と考へられる所に、自己を見るのである、即ち自己は感官的限定の極限に於て見られるのである、内部知覚と考へられるものはかゝる限定の極限を意味するものでなければならない。併し屢云つた如く我々の自己は単にかゝる限定の極限として考へられるものではなく、そこには合理的なるものが非合理的なるものを包む意味がなければならぬ、否外が内であるといふ意味がなければならぬ、そこには立場の転換がなければならぬ。かゝる感官的限定がメン・ドゥ・ビランの所謂内的情知 *sentiment intime* として私が働く、私が欲するの意味を有つたものでなければならぬ・所謂内部知覚と考へられるものもその実、内的情知の意味を有つたものでなければならない。我々は意志的行為といふ如きものに於て感官的意義を失ふと考へるが、意志的行為と考へられるものが勝義に於て非合理的なるものの合理化といふべきものであつてそれは最も深い意味に於て直観の意義を有つたものでなければならない。感官と考へられるものは却つて意志的行為の意味を有つことによつて、非合理的なるものの合理化として感官の意義を有するのである。感覚の内にはメン・ドゥ・ビランの云ふ如くボロンテが含まれてゐなければならない、否感覚とは不完全なる意志的行為と考へることもできる。それで我々の自己が非合理的なるものの合理化として感官に即して考へられると云つたことは、勝義に於て自己が行為に即して考へられると云ふことでなければならない。我々の自己は私の所謂行為的一般者の自己限定として考へられるものでなければならない、行為的一般者の自己限定に於ては直接にあるものが一々自己自身を表現するものとなるのである、自己自身を自覚し自己自身を言表する意味を有つのである。而してそれは感覺的なるものが自覚的意義を有つと云ふことでなければならない。単に受働的なる所謂感覚といふ如きものであつても、且ハ体的意義としてはかゝる意義を有たねばならぬのであるが、自己に於て自己を非合理的に限定することによつて自己自身を見る即ち自己自身を直覚するといふに至つて、内が外を包む意味を有し、行為的自己として内部知覚的自己といふものが考へられるのである。併し無にして見る行為的自己の自己限定の意義はそこに終るのではない、否そこに始まるのである。内部知覚的自己に於ては尚内が外に附着して居ると考へられねばならぬが所謂意志的行為と考へられるものに於てはかゝる合一点を越えて尚一層深く自己自身を非合理的に限定することによつて自己自身を見ると云ふことができる、即ち尚一層深い意味に於て外を内に見ると云ふこと

ができる。併し意志的行為に於て内部知覚を越えて如何に深く自己自身を見ると云つても、非合理的なるものの合理化の意味に於て感覺的なるものを離れるのではない。我々の身体的限定と考へられるものなくして意志的行為といふものはない。感覺的限定が非合理的なるものの合理化の意義を有つといふのも、それは身体的限定の意義を有つといふに外ならない。感覺的なるものが行為的意義を有つた時、即ち自己自身の意義を有つた時、それが身体と考へられるものであるのである。我々の身体と考へるものは感覺的にして行為的意義を有すると共に、又表現的意義を有するのである。限定するものなくして自己自身を限定する非合理的なるものの合理化といふのは広義に於て身体的限定といふことができる、身体といふ意味に於て感覺的なるものが直に内と考へられるのである。事実が事実自身を限定すると考へられる内部知覚の尖端に即して自己といふものが考へられると云ふのも、内的感官と考へられるものに身体的限定の意味があるためでなければならぬ、包むと云つたのも感覺的なるものが身体的意義を有つが故に外ならない。我々の自己が無にして自己自身を限定すると考へられる時、そのノエマ的方向に見られるものは、それが無の自覚のノエシス的限定の意義を有するかぎり、非合理的なるものの合理化として身体的意義を有つてゐなければならぬ。我々の意識と考へられるものはすべてかゝる身体的限定に即して考へられるのである。併し無にして自己自身を限定すると考へられるかぎり、そのノエマ的限定は何処までも非合理的なるものの合理化として事実が事実自身を限定すると云ふの外はない、そこでは感覺的なるものは身体的意義を失ひ、意識といふものも失はれて唯死あるのみである。併し一方から見れば斯く考へられる所に無にして自己自身を見るといふ真の自覚の意味があるのである、無が無自身を見るといふ意味があるのである。感覺的なるものが所謂身体的意義を失ふと考へられる所に、却つて非合理的なるものの合理化として真に自己の身体性を得ると考へることもできる、感官の中に含まれてゐた真の行為的意義が現れるのである、我々はそこに純なる自己の身体を得ると考へることもできるのである。かゝる意味に於て芸術的作品といふ如きものは芸術家の純なる身体と云つてよい。我々の真の人格と考へられるものもかゝる意味に於て我々の身体的限定に即して見られるものでなければならぬ。それは無にして自己自身を見るものの内容として表現的内容の意義を有つたものでなければならぬ。すべてのものはかゝる人格を中心として見られるのである、所謂意識的自己と考へられるものも此から見られるものでなければならぬ。かゝる意味に於て内と考へられるものが外であり、外と考へられるものが内であると云ふことができる。人格とは考へられたものでなく、眼が色を見、耳が音を聞くと云ふ如く、サンチマンの対象として見られるものでなければならぬ。

私が今此手を動かした、私が今此語を發したと考へられるも、此手が動いた、此音が響いたといふことは、樹が動

いた、鳥が鳴いたといふに同じく、眼にて見、耳にて聞く外界の事実と異ならない。如何にしてかゝる運動、かゝる音響が自己の行為と考へられるか。心理学者は媒介としてそこに筋覚といふ如きものを考へる。併し筋覚といふも一種の感覚に過ぎない、所謂感覚といふ立場からは自己意識といふものに達することはできない。然らば自己とは考へられたものであろうか。考へられたものは、物であつて自己ではない。反省によつて自己が知られると云ふならば、反省とは如何なるものであるか。反省といふことが可能なるには既に内的感官といふものがなければならぬ、外的感官によつて外界といふものが見られるが如く、内的感官によつて内界といふものが見られるのである。我々が対象認識から翻つて自己自身を反省すると云はれるが、それは単に思惟によつて可能なるのでもなく、推論によつて可能なるのでもなく、そこに内的感官の直覚といふものがなければならぬのである。併し内的感官と考へられるものは直覚といつても、外的感官の如く現在そこに有る何物かを直覚するのではない。内部知覚には一面、記憶といふ如き意味がなければならぬ、それは変ずるものの直覚、出来事の直覚でなければならぬ。無いものの直覚といふのは矛盾の様ではあるが、記憶といふのは固、かゝる矛盾を含んだものでなければならぬ。我々が或事を想起するといふとき、その事柄は客観的には既に過ぎ去つたものであり、現在にないものでなければならぬ。併し出来事とその瞬間瞬間に消え去るものならば、記憶といふものの成立し様はない。そこには一瞬一瞬に消え去ると共に、消え去らざるものがなければならぬ、記憶の底には「永遠の今」といふ如き直覚がなければならぬ。内部知覚の一面には記憶の意味があると共に、記憶の一面には内部知覚の意義があると云ふことができる。記憶とは延長せる直覚であり、内部知覚とは収縮せる記憶といふことができる。自己が自己を知るといふことは、永遠の今が今自身を限定することを意味すると考へることができる。反省によつて自己自身を知るといふのはかゝる意味でなければならぬ。何物かが過去から現在に動いて来るとして、過去が現在を含み、更に未来を含むと考へられるかぎり、それは物が動くと思へられる。かゝる場合、我々は何か外界の出来事を知覚すると考へる。併し自己が自己自身を知るといふ内部知覚に於ては、現在が過去未来を包むといふ意味がなければならぬ、そこにアウグスチヌスのいふ如き記憶の意義があるのである、何処までも自己の中に自己を見て行く所に、内部知覚の意義があるのである。故に内部知覚に於ては、いつでも現在を中心として過去未来が考へられるのである、内部知覚といふには先づ現在が現在自身を限定するといふことがなければならぬ。上に感官といふのは非合理的なるものの合理化といふことであり、自己といふものは感官に即して考へられねばならぬと云つたが、過去と考へられるものは既に合理化せられたものであり、未来と考へられるものは將に合理化せらるべきものである。眞の非合理的なるものは現在の底に考へられるものでなければならぬ、非合

理的と考へられるものは永遠の今の内容でなければならぬ、かゝる永遠の今の内容が直覺的に限定せられるかぎり、そこに自己といふものが考へられるのである。眞の自己の内容といふものは永遠の今の内容に外ならない、外が内となると考へられる所以である。我々の世界は過去から未来に向つて流れ去るのではない、過去も現在に向つて流れ、未来も現在に向つて流れるのである、我々の世界は現在より出でて現在に還るのである。現在として固定し得た時は既に過去であり、未来は未だ来らない、かゝる意味に於ては現在は掴み得ざるものである。併しかゝる現在が現在自身を固定することによつて、過去未来が考へられるのである、アウグスチヌスの云つた如く過去は現在の過去、未来は現在の未来、現在は現在の現在といふべきである。そこに非合理的なるものの合理化として自己といふものがあり、それによつて事実といふものが限定せられるのである。それで内的感官に即して自己といふものが考へられるといふことは、永遠の今の自己限定といふ意味を有し、」斯く永遠の今の自己限定として現在が過去未来を限定するといふこと、即ち現在を中心として一つの世界が定まるといふことは、我々が行為するといふことでなければならぬ。行為と考へられるものに於て、我々はいつも永遠の今といふものに接して居るのである、我々の行為はいつもそこから出立するのである。内部知覺に即して自己といふものが考へられるのも、かく考へられるかぎりそこに行為の意味がなければならぬ。永遠の今の自己限定と考へられるものは、現在が何処までも擡むことができないと考へられる如く、無限に深いもの、無限に到達することのできないものでなければならぬ、その底は無限の暗黒であり、無限の非合理的と考へられねばならぬ。而もそれが永遠の今の自己限定として、現在が現在自身を限定するかぎり、即ち現在が掴み得られるかぎり、それが行為の意義を有し、非合理的なるものの合理化として自己といふものが見られるのである。而して時といふものが考へられるのも一般者の自己限定として考へられるのでなければならぬ、永遠の今の自己限定と考へられるものは絶対に無なる一般者の場所自身の自己限定といふことができる、そこに眞の直觀の意義があるのである。行為といふのは永遠の今の自己限定として非合理的限定と考へられると共に、今が今自身を限定するといふ意味に於て自己自身を見るといふことができる。前に自覺に於ては自己自身の中に非合理的に限定することによつて合理化すると云つた所以である。我々が所謂感官によつて外界の事実を知ると考へられる時、全く受働的として自覺とか行為とかいふ如きものとは異なると考へられるかも知らぬが、事実が事実自身を限定すると考へられる時、そこに永遠の今の自己限定の意味がなければならぬ。今が今自身を限定するかぎり、即ち現在が掴まれるかぎり、事実といふものが限定せられるのである。限定せられた現在の内容として外的事実といふものが考へられ、限定する現在の内容として内的事実といふものが考へられる。現在が現在自身を限定するといふ意味に於て、内的事実が即外

的事実であり、外的事実が即内的事実と考へられるのである。現在といふのは自己矛盾である、その捕捉すべからざる尖端に於て、絶対に非合理的なるものの合理化として、そこに外的感官といふものが考へられ、それによつて外的事実といふものが限定せられ、而もそれが何処までも自己自身の限定であるといふ意味に於て、そこに内的感官といふ如きものが考へられ、それによつて内的事実といふものが限定せられるのである。併し現在の自己矛盾といふのは現在が現在の中に自己自身を限定するといふことであり、無限の行先と考へられるものは自己の中に自己を見るといふことになければならぬ。唯、無にして自己自身を見ると考へられる所に自己矛盾の意味があるのである。要するに真の自己矛盾とは非合理的なるものの合理化といふことに外ならない、自己が自己自身を見るといふことでなければならぬ。かゝる意味に於て、我々が外的感官によつて外的事実を見るといふことは、永遠の今の自己限定として一面に行爲の意味を有つてゐなければならぬ。外的事実といふも、私が見るのであり、私が聞くのであり、永遠の今の自己限定として行爲的自己の限定と考へられるかぎり、それが外的事実を知覚すると考へられるのである。すべて行爲的自己の自覚の立場から事実の客観性といふものが立てられるのである、感官と考へられるものが行爲の意味に於て永遠の今に触れると考へられるかぎり、客観的事実といふものが考へられるのである、現実と夢とを区別することは行爲的自覚によらねばならない。すべて事実と考へられるものは先づ内的事実でなければならぬ、夢であつてもそれは内的事実である。併し内的事実の底には既に行爲的自己の自己限定の意味がなければならぬ、忘れることも記憶の中にあるといふ意味に於て記憶も一種の行爲であるのである。その底と考へられる代りに現在が現在自身を限定すると考へられ、それが真の行爲的自己の自己限定の意義を有するかぎり、客観的事実といふものが見られるのである。現在が現在自身を限定するといふ永遠の今の自己限定より見れば、かゝる限定そのものが行爲的限定といふべく、その無限に掴むことのできない今の尖端に於て、即ち自覚の尖端に於て、事実が事実自身を限定すると考へられ、而もそれが絶対に限定するものなきものの限定として、その能限定的意義に於て無数の今が考へられねばならない、それが無数の自己と考へられるものである。併し又現在が掴まれると考へられるかぎり、そこに弛緩した今といふものが成立する、そこに所謂我々の身体といふものが考へられ、而してかゝる身体的限定に即して内部知覚的自己といふものが考へられるのである。記憶といふのは弛緩した今の限定といふべきである、行爲的自己そのものから云へば、そのノエマ的限定の極限に外的事実を見、そのノエシス的の方向に記憶を見るといふことができる。知識はすべて行爲的自己の自己限定から始まると云つてよい。

私が絶対無の自覚的限定といふのは、単に我々が通常、自覚的意識と考へるものを、その自覚の極限にまで押し進めたものと云ふのではなく、又我々の行為とか知識とかいふものと何等の関係なき単なる神秘的体験といふ如きものでもない、否却つて絶対無の自覚的限定といふ意味に於て行為といふものが考へられ、行為的限定として所謂自覚的限定といふものが考へられ、自覚的限定といふものが考へられることによつて知るといふことも考へられるのである。或は自己自身を意識すること、否行為するといふことすら、対象的認識から反省によつて知られると考へられるかも知れないが、単なる対象的認識といふものから如何にしても反省といふものは出て来ない。反省といふ如きものが可能なるには対象的限定を包んで、之を元に引き戻す立場が先づ与へられてゐなければならない。対象に対して単に反動的に知られるものは亦何処までも対象たるに過ぎない。我々は色を見るが見ることを見ることはできない、音を聞くが聞くことを聞くことはできないと云はれるが、我々の内部知覚といふのは単に考へられるものではない、思惟作用ではない。私は見ることを知り聞くことを知るのである、而してかゝる内部知覚といふ如きものなくして反省といふものは成立しない。何等かの対象が見られなければ見るといふことはないと云はれるかも知れぬが、見るといふことがなければ何等かの対象が見られるなど云ふことはできない。対象認識といふことも我々に直接なる内部知覚の事実から出立せなければならない。而して内部知覚といふのは上に云つた如く行為的自己限定として考へられるものでなければならない。

私ははじめ主語的方向への超越によつて一般者の超越を考へた。個物を越えた自覚的自己を限定するものとして自覚的一般者を考へ、見るものなくして見るといふことを真の自覚として、更にその背後に行為的一般者といふものを考へ、かゝる行為的限定の根抵を成すものとして絶対無の自覚といふものを考へた。自覚の論理的意義を明にすることによつて、従来自覚的内容として直覚的と考へられ、非合理的と考へられたものの深い底までも、それが考へられるかぎり、如何なる意味に於て論理的意義を有し、如何なる意味に於て考へられるかを明にしようとしたのである。それがため、一般者の限定の最後の根抵をなすものが、却つて単に所謂意識的限定の極限として考へられるものと考へられたかも知れない。併し私の一般者の自己限定といふものは固自覚的限定を意味するものである、而して自覚的限定に於ては最後と考へられたものが最初のものでなければならない。論理的限定と考へられるものは最も深い意味に於ける自覚のノエマ的限定の意義を有つたものでなければならない、所謂意識的自覚と考へられるは却つてかゝる自覚的限定のノエシス的限定として考へられたものに過ぎない。それでは自覚の根抵として、すべての自覚的限定がそれによつて成立すると考へられねばならぬ私の所謂絶対無の自覚といふのは、如何なるものであらうか。それは上

に云つた如き「永遠の今」の自己限定といふ如きものでなければならない。行為的自己の自己限定の意義なくして内部知覚的自己の自己限定といふものなく、行為的自己の自己限定と考へられるものは永遠の今の自己限定の意義を有つて居るのである。永遠の今 *nunc aeternum* など云へば、すぐ神秘的と考へられるかも知れぬが、神秘学者はそれによつて「永遠なるもの」即ち神を考へた。併し私の永遠の今の限定といふのは唯、現在が現在自身を限定することを意味するのである。移り行く時と永遠とは現在に於て相触れて居るのである、否、現在が現在自身を限定するといふこの現在を離れて、永遠といふものがあるのではない、現在が現在自身を限定すると考へられる所に真の永遠の意味があるのである。過去は現在の過去、未来は現在の未来と考へられるが如く、現在の現在といふものから過去未来が考へられるのである。現在が現在の中に現在を限定する「現在の現在」といふものが永遠の意味を有つたものでなければならぬ。而して斯くノエマ的限定の意義に於て永遠の今と考へられるものは、ノエシス的限定の意義に於て記憶と考へられるものでなければならない。アウグスチヌスが忘れるといふことも記憶の中にあると云つた如き記憶は永遠の今の自己限定の意義を有つたものでなければならない。我々が朝起きて昨日の我と今日の我と直に結合すると考へる所にも、永遠の今の自己限定の意義がなければならない、記憶は内的時であり時は外的記憶といふことができる。而してかゝる意味に於て永遠の今の自己限定と考へられるものは私の所謂絶対に無にして自己自身を限定する絶対無の自覚的限定といふものでなければならない。現在は現在自身を否定することによつて現在であり、時は時自身を否定することによつて時である、死することによつて生きるのである。ケルケゴールが「ブロッケン」に於て我々が執拗に存在を証明せうとする間は存在は見られない、証明を棄てた時そこに存在がある、存在といふものが見られるには、かく棄てるといふ瞬間がなければならぬといふ如きことを云つて居る。私の所謂今の限定として絶対無の自覚的限定といふのはケルケゴールのパラドックスの如きものと考へることができる。それは非合理的なるものの合理化として先づ官能的と考ふべきものである、而して勝義に於ける官能的限定として内部知覚の意義を有つて居なければならない。官能的限定と考へられるものがいつも我々に現在と考へられるものであり、官能的なるものに於て我々はいつても永遠なるものに接して居るのである、所謂物質と考へられるものもかゝる意味に於て永遠なるものと考へられるのである。而も内部知覚の尖端に於て我々に真の現在と考へられるものがあり我々は内部知覚の尖端に於て事実が事実自身を限定すると考へられる事実そのものに接するのである、即ち真に永遠なるものの内容に接するのである、真の客観者に接するのである。外的感官の対象として所謂物質と考へられるものは一般的なるもの、非實在なるものに過ぎない。而して自己は常に感官に即して考へられる如く、真の現在といふものが考へられる所、そこ

に真の自己といふものがあり、自己とは永遠の今の自己限定であり、永遠の今の自己限定とは私の所謂無にして見る真の自覚に外ならない。かゝる意味に於て真の現在は各人の現在であり、各人は各人の現在を有つ、所謂絶対時といふ如きものは考へられたものに過ぎない。永遠の今の限定として現在が現在自身を限定する、そこにいつも真実性といふものがあり、その限定される今の方向に、云はfそのノエマ的方向に物の世界が見られ、その限定する今の方向に、云はfそのノエシス的方向に、人格の世界が見られるのである。之を自覚的限定の意味に於て云へば、現在が現在自身から出立して何処までも現在の中に現在自身を捕へようとするのが、我々の行為と考へるものである、かゝる行為的限定に即して我々の自己といふものが考へられる。併し今は永遠に捕へることのできない未来である、捕へたものは過去たるに過ぎない。今が今自身を失つたと考へられる時、即ち自己が自己自身を失つたと考へられる時、そこに永遠の今の世界として所謂対象界といふものが見られるのである。行為的自己が自己自身を失ふと考へられる行為的自己の尖端に於て、尚内部知覚的自己といふものが考へられ、それが行為的自己の自己限定の意義を有するかぎり、知るといふことが考へられる、知るといふことは尚行為的自己の自己限定の意義を有するのである。併し永遠の今の自己限定には一面に絶対的自己否定の意味がなければならない、永遠の一面には時を超越し時を否定した意味がなければならない。それが所謂「時の充実」と考へられるものであり、そこに絶対の有があると考へることができる、絶対無のノエマ的自覚に於て絶対の有が見られるのである。かゝる意味に於て永遠の今の自己限定に於て我々の行為を離れた世界が成立する、それは時を超越した世界、今を失つた永遠である。所謂認識対象界と考へられるものは此の如き意味を有つたものでなければならぬ、それは行為としての我々の知的作用をも超越すると考へられるのである。併し今が今自身を限定するといふ瞬間的限定を離れて、永遠の今の限定と考へらるればられる程、それだけ非実在的でなければならない。我々はいつも瞬間的今の尖端に於てのみ真実在に接触するのである、そこに事実が事実自身を限定するといふ意味に於て客観的知識成立の根柢があるのである。今が今自身を限定するといふのが我々の行為と考へるものであり、我々は行為に於て永遠なるものの内容に触れ、行為によつて永遠なるものの内容を見るのである。今が今を掴む永遠の今の内容として行為的自己が自己の内にイデヤ的内容を見ると考へられるが、かゝる行為的自己の自己限定が、無が無自身を限定するといふ意味に於て、否定的無に触れると考へられる所に、行為的限定は思惟作用として真理といふものを見るのである。

永遠の今の自己限定には一面に於て所謂時を超越した意味がなければならぬ、時を離れた意味がなければならぬ。それによつて時を超越したもの、時を離れたもの、所謂永遠なるものが限定せられるのである、イデヤ的内容と考へ

られるものがそれである。併しかゝる意味に於て永遠の内容と考へられるものは、所謂「時の充実」の意味に於てあるものであるが、それが時を越え、時を離れると考へられるかぎり、それは非実在的たるを免れない。現在が現在自身を限定するといふ時、現在は何処までも掴むことのできないものである、かういふ意味に於ては現在は無である、是に於て永遠の今の限定として単なる受働性といふものが考へられる、無は単に受け取るもの、単に映す鏡と考へられる、そこに「時のないもの」が考へられるのである。併し無が無自身を限定する所に、現在が現在自身を限定する真の永遠の今の限定の意味があるのである。現在の底は絶対の無でなければならぬ、現在の底に現在を限定する何物かがあるならば、現在が現在自身を限定するといふ意味はなくなる、従つて真の現在といふものがなくなると共に真の時といふものがなくならねばならない、真の時と考へられるものは絶対に無なるものの自己限定でなければならぬ。而して斯く現在が現在自身を限定すると考へられる所に客観的知識成立の意味があるのである、かゝる意味に於て絶対無の自覚によつて知識が成立すると云ふことができる、そこに事実が事実自身を限定するといふ意味があり我々の知識はそこから始まるのである、事実の背後には何物もない、物とは事実即して考へられたものである、限定するものなくして自己自身を限定する所に事実といふものがあるのである、事実とは現在が現在自身を限定する真の現在の内容でなければならぬ、事実に於ては瞬間がヒポケーメノンとなるのである。之を掴まれた今の立場から云へば、即ちノエマ的に云へば、「是」といふものであり、之を掴む今の立場から云へば、即ちノエシス的に云へば、「私」といふものである。「是」といふものの裏にはいつも「私」といふものがなければならぬ、この花が赤いといふことは私が見るといふことである。限定せられた今、即ち「是」といふものを中心として永遠の今の自己限定を考へれば、それによつて所謂認識対象界といふものが限定せられるのである、私の所謂判断的一般者といふのはかゝるものを意味するに外ならない。之に反し限定す惹今、即ち「私」といふものを中心として永遠の今の自己限定を考へれば、それによつて我々の意識の世界と考へるもの、即ち内界といふものが限定せられる、それが私の所謂自覚的一般者の限定と考へるものである。従来学問と考へられるものは所謂対象認識の意味を有つたものである、カント哲学に於てはかゝるものを知識と考へる。併しかゝる立場からは私は我々の意識界といふものは考へられない、否、歴史といふものすら考へられない、厳密には唯自然科学の世界といふ如きものだけが考へられると思ふ。人は無造作に対象認識から反省によつて内界を知ると考へるが、限定せられた今の立場から限定する今の立場に還ることはない、対象認識の立場から自覚の世界に還ることはできない。自覚といふものの成立するには、私が上に云つた如く感官的意義を有する内部知覚といふものがなければならぬ、かゝる直接なる知識の立場があつてこそ此に還るといふことが

できるのである、対象認識といふのも固此から出立したものなるが故である、之に基いたものなるが故である。対象認識といふものにのみ固着すれば、私が私自身を知るといふ如きことも知識でないと考へられるかも知れない。併し事実が事実自身を限定するといふことを知識とすれば、それは勝義に於ける知識でなければならない。それは芸術的直観の内容といふ如きものでもなければ、単なる要請といふ如きものでもない、寧ろデカルトが考へた如く数学的直観の如き意味に於ての知識でなければならない。対象認識の立場から自覚の立場に至ることができないと云つた如く、所謂意識的自己の自覚の立場から対象認識の立場に至ることもできない、内部知覚の立場から意識一般の立場に至ることはできない。かゝる立場のみを固執するものは要するに心理主義たるを脱し得ないのである。唯、それが永遠の今の自己限定として、広義に於ける行為的自己の自覚の意義を有するかぎり、認識主観の意義を有し得るのである。今が今自身を限定すると考へられる、その瞬間に於て内が外であり、外が内である、内的事実が即外的事実であり、外的事実が即内的事実である。かゝる意味の限定は無が無自身を限定する絶対無の自覚的限定として唯弁証法的にのみ理解すべきである。事実が事実自身を限定するといふ、事実そのものの限定といふべきものは、云はば弁証法的主観の立場といふ如きものに於てのみ成立するのである。私は屢自覚に於ては外が内となり内が外となると云つたが、弁証法的限定に於ては外が内とならなければならない、弁証法的限定の背後には对象的に何物もあつてはならない、それは非連続の連続でなければならない、無の自己限定でなければならぬ。所謂自覚の立場から云へば、そこにケルケゴールの云つた如きデカルト的潜水夫の逆立がなければならない、真に客観的知識と考へられるものは唯弁証法的認識の立場に於てのみ成立するといふことができる。リッケルトの如き形式的主観ならばいざ知らず、カントの意識一般が感官的内容を含むと考へられるかぎり、それは右の如き意味に於て弁証法的でなければならない、単に限定せられた今の立場ではなくして、自己自身を限定する今の立場でなければならない。屢云つた如く、我々の感官と考へるものは非合理的なるものの合理化の意味を有つたものでなければならぬ、非合理的なるものの合理化といふことは外を内となすといふ意味を有し、現在が現在自身を限定する無の自己限定の意味を有するものとして、既に弁証法的と考へられねばならない。而して勝義に於ける感官ともいふべき内部知覚の尖端に於て事実が事実自身を限定すると考へられ、具体的なる事実そのものは自己自身を弁証法的に限定すると考へられるのである。カントがすべての表象に伴ふといつた「私が考へる」の「私」は、私の所謂絶対無のノエマ的自覚の意義を有つたものでなければならぬ、自己自身を限定する瞬間的今の意義を有つたものでなければならぬ。斯くありてこそ、それが真に客観的認識の主観といふべく、又同一の認識主観の意義が意識界にも広げられて、種々なる知識を構成すると考へ得るのである。要

するに感官の種々なる意義によつて種々なる知識が成立すると考へることができる、所謂外的感官によつて自然界といふものが成立し、内的感官によつて意識界が成立すると考へることができる。加之、感官は非合理的なるものの合理化として、固、行為的限定の意義を有つたものでなければならない、今が今自身を限定する無の自覚の具体的限定の意義は行為といふことでなければならない。かゝる意味に於て歴史界といふものが成立すると考へることができる。而して行為的限定といふものが無の自覚の且ハ体的限定として、真の意識一般は最も深い意味に於ての歴史的認識主観といふことができる、自然科学的認識主観と心理学的認識主観とは、そのノエマ的方向とノエシス方向とに考へられるのである。事実が事実自身を限定するといふ意味に於て事実そのものの内容と考へられるものは、歴史的でなければならない。我々の具体的体験の内容と考へられるものは固、人格的でなければならないが、それが無の自覚的内容の意義を有するものとして、ノエマ的には事実が事実自身を限定する意義に於て知的内容の意義を有すると考へることができる。この意味に於ては何処までも歴史的意義を脱せないと考へることができるであらう。

限定するものなくして自己自身を限定する、無にして自己自身を限定するといふことが、永遠の今の自己限定といふことであり、それは時がなくなるといふことではなくして、却つて今が今自身を限定するといふことでなければならない、瞬間が瞬間自身を限定するといふことでなければならない、掴むことのできない瞬間が瞬間自身を限定すると考へらるれば考へられる程、無にして自己自身を限定すると考へられるのである。そこには絶対の非合理性がなければならない、それは単に合理的に対する意味に於ての非合理的でなく、合理的なるものを包む意味に於ての非合理的でなければならない、自己に於て自己を非合理的に限定することによつて合理化するものでなければならない、それはケルケゴールのパラドックスといふ如きものでなければならない、我々は今が今自身を限定する瞬間に於て神に触れるといふことができる。永遠の今の自己限定としてのかゝる今の限定は、今を中心として掴む今の方向と擡まれた今の方向とへ、無限の限定が考へられる、即ち絶対無の自覚に於てあるものはそのノエシス方向とノエマ方向との無限の限定に於てあると云ふことができる。この無限の両端は結び附くことはできない、結び附くと考へられるかぎり今が今を失ふと云はねばならぬ、単に掴まれた今となる、真の時といふものではなくなる、単なる永遠となるのである。それが永遠の今のノエマ的限定と考ふべきものである。而してかゝる意味に於て今が今自身を掴むことを我々の行為と考へることができるであらう。自己自身を限定する今の底には、無限の非合理性があり、それが限定せられるかぎり、掴まれた今の方に合理的なるものが見られる。前者は今そのものを含むものとして実在的と考へられ、後者は今そのものを失ふの故を以て、即ち現在を失ふの故に、非実在的と考へられるのである。斯く行為といふもの

が掴む今の自己限定と考へられるが、永遠の今のノエシ的限定、即ち絶対無の場所的限定とは如何なるものであらうか。私はその方向に於ては現在といふものが分散せられ、無限の現在といふものが、成立すると考へねばならぬと思ふ、到る所に現在がある、場所時Ortzeitといふ如きものが成立するのである。真の現在といふものにはその底があつてはならぬ、底があればそれは現在といふものではない。現在が深くなるといふこと、現在が現在自身を限定するといふことは、現在がノエマ的束縛を脱して無数の現在が成立するといふことでなければならない、各人は各人の現在を有つのである。客観的に唯一の現在といふものが限定せられ、絶対時といふものが考へられるかぎり、それは永遠の今のノエマ的限定の意義を脱せない、考へられたものである、時を超越したもの、単に永遠なるものの自己限定といふの外はない。古来神秘学者と云はれた人々でも全然かゝる考へを脱し得なかつた、神は実在界と没交渉的たるを免れない、そこでは今といふものはなくなるのである。真の永遠の今の自己限定と考へられるものは、時を超越したものではなく、時を包んだものでなければならない、自己に於て自己自身の限定として無数の今を成立せしめるものでなければならない、その一々が一次的なると共に永遠の意味を有つたものでなければならない、その一々の点に於て神の創造作用に接すると考へられるものでなければならない。永遠の今のノエシ的限定によつて神の肖像として人Person といふものが限定せられるのである。私が「於てあるもの」を限定する場所の限定といふのは、固、此の如きものでなければならない、包むといふ如き外延的限定の最も深い根拠は此にあるのである。人といふものが絶対無の自覚のノエシス面、即ち場所に於てあるものであつて、その自己限定が行為と考へられるものである。今が今自身を欄む作用が行為と考へられるものであり、行為によつて掴まれた今の内容がイデアと考へられるものである、即ち永遠の今の内容が行為によつてノエマ的に見られると云つてよい。行為に於て我々はいつも永遠なるものに触れると考へられる所以である。絶対無の自覚に於てあるものを考へれば、上に云つた如くノエマとノエシスとの相反する両方向に無限の限定といふ如きものが考へられるが、絶対無の自覚そのものに於ては、自己自身を限定する今そのものに於てはノエシスとノエマとが一でなければならない、真に無が無自身を限定することでなければならない、映すものと映されるものとが一でなければならない、鏡が鏡自身を映すと云つてよい。そこには単なる直観の静止があるのではなく、無にして有を限定する、死することによつて生きるといふ如き真の弁証法的運動は実は之によつて成立するのである。かゝる立場は絶対に非合理的なるものの合理化として、ノエマ的には事実が事実自身を限定するといふべく、ノエシス的には神の天啓とも云ふべく、我々の立場からは唯感覚と信仰とあるのみである。その根拠が合理的なるが故に弁証法といふものが成立するのではなく、非合理的なるが故に弁証法といふものが成立するのである。絶

対無のノエシ的限定によつて人といふものが成立すると云つたが、各の人は各自の自己の根抵に於てかゝる絶対無の自覚そのものに接して居ると云ふことができる、即ち神に接して居るのである。ケルケゴールが「死病」に於て、我々の自己といふのは自己自身に關係し、此關係に於て自己を他に關係する關係である、それで人は失望して自己が自己たらざることを欲すると共に、失望して自己が自己たることを欲する、人は死病にかゝつて居るのであると云つて居る。而してかゝる關係の根抵に神があるのである、人はそのノエシ的限定の根抵に於て、非合理性の合理性として神に触れると云ふことができる、そこには唯信仰があるのみである。併し斯く絶対の非合理性の合理性に接するといふことは一面に絶対に非合理的なる事実そのものに接するといふことを意味せなければならない、人はそのノエマ的限定の根抵に於て盲目的物質に接するのである、そこには唯感覺といふものがあるのみである。併し斯く考へられると共に、「於てあるもの」からして無限の両極端と考へられるものは此の現在的瞬間に於て一であるのである。こゝに非合理的なるものが即合理的であり、合理的なるものが即非合理的である、映すものが映されるものであり、映されるものが映すものであるのである、真實在と考へられるものはかゝる瞬間的現在の自己限定の内容として考へられるのである、すべての実在的知識の根抵は此にあるのである。それは絶対的否定の肯定として、一面に單なる事実そのものの意義を有すると共に一面に我々の運命を構成するものでなければならぬ。真に自己自身を限定する事実そのものは瞬間的今そのものの限定として、一面に我々の運命の意義を有つてゐなければならない。かういふ意味に於て事實はいつも云はゞ原始的歴史 *Urgeschichte* の意味を有つて居るのである、我々の人格はかゝる原始的歴史によつて構成せられるのである。かゝる限定は非合理的なるものの自己限定として、即ちパラドックスの自己限定として、非連続の連続でなければならない。各人は非連続の連続として限定せられるのである。各人は各人の今を有ち、各人は独立であり、自由である。私の場所的限定といふのは固、非連続的なるものを限定するのである、而してそれが真に否定の肯定として弁証法的と云はるべきものでなければならぬ、我々の人格の底には深い弁証法的なるものがあるのである、悲劇的なるものがあるのである。ベーゲルの如く弁証法の背後に理性的統一の如きものを考へれば、各人の自由といふ如きものは遂に没せられなければならない。又カントの如く他の人格を認めることによつて自己が人格となると云つても、それは人格の認識であつてその存在の理由を明にしたものではない。右の如くにして無の自覚に於てあるものとして人格の世界といふものが成立すると共に、それは無にして自己自身を限定するものとしてその自己限定作用が行為と考へられるものでなければならない。我々は行為によつてイデア的内容を見るのである、永遠なるものの内容が行為によつて実現せられると云つてよい。我々は各瞬間に於て永遠なるものに接して居る、時の

充実の方向に向ふのが行為と考へられるものである。瞬間的現在を失つた時、行為は芸術的直観の如きものとなる、芸術的直観の内容は「時の充実」の内容として時を含むと云ひ得るが、現在の瞬間を含まない。これに反し人格的存在を措定する永遠の現在そのものの一面には人格否定の意味を有つてゐなければならない、「於てあるもの」として個物的なるものを限定する場所そのものは一面には個物的なるものを否定する意味を有つてゐなければならない。我々は各の瞬間に於て絶対に非合理的なるものに直面して居るのである、絶対の事実に直面して居るのである、そこでは我々は行為ではなくして感官である、我々はそこに原始的歴史の事実に接触するのである、それは我々の運命の内容といふべきものである。ケルケゴールの云ふ如くそこに我々は自己自身に関係することによつて他に関係する自己として、自己自身の存在そのものに罪惡の意味があり、無限の不安がある。それは深い意味に於ける宗教的事実の意義を有すると共に、經驗的知識の基礎はそこにななければならない。非合理的なるものの合理化として弁証法的なる感官的事実に、經驗的知識の基礎があるのである。所謂認識主観によつて綜合統一せられる前に、それは原始的歴史の事実でなければならない、瞬間的現在の自己限定として非連続的な事実でなければならない、そこには因果律をも否定するものがなければならない。而してかかる事実が限定せられるのは、私の所謂無の自覚の限定によつて、非連続の連続として限定せられるのである。上に云つた如く「今」そのものの自己限定として無限の今が限定せられると考へることができ、瞬間瞬間が宇宙の中心となると考へることができる。最も厳密なる意味に於て経験科学といふべき物理学の現状は此に近づいたのではないかと思ふ。従来考へられた自然といふ如きものは一種のイデヤに過ぎない、思想的行為の自覚的内容と見らるべきものである。以上の如く考へるならば無の自覚に於てあるもの、即ち人といふものからして、事実とイデヤとを相反する二方向に見るといふことができる。イデヤと考へられるものは行為によつて見られる自己自身の人格的内容と考へることができるが、事実そのものといふのは人そのものを限定すると共に之を否定する絶対無そのものの自己限定の内容と考へることができる、人から云へばノエマ即ノエシス、ノエシス即ノエマとして自己自身を限定する今そのものの内容たる意義を有つたものでなければならぬ。人そのものが絶対無のノエシス的限定によつて限定せられるものとして、イデヤも一面に事実的内容の意義を有すると共に、後者は肯定即否定として一面にイデヤ否定の意義を有つてゐなければならぬ、絶対の非合理性の意義を有つてゐなければならない。それは自己自身を限定する事実そのものとして真理のイデヤを基礎付ける意義を有すると共に、原始的歴史の事実として即ち運命として知的自己そのものをも限定する意義を有つてゐなければならない。知的自己と考へられるものは、行為的自己の立場に於てそれが絶対無の自覚によつて裏付けられることによつて、自己自身を否定する意味

を有つたものと云ふことができる、行為的自己の意味を有しながらその極限に於て考へられるものである、即ち行為的自己にして絶対無の自覚そのものに触れる所に考へられるのである。カントの意識一般といふものも此の如き意味を有つたものでなければならない、行為的自己の意義を有するかぎり、それはイデアを見るといふ意義を有するのである。カントは唯それまでに考へたのであるが、更に之を深めて絶対無のノエマ的自覚の意味に於てはそれは原始的歴史の主観といふ意義を有つと考へることができる、そこでは事実が事実自身を限定するとして弁証法的主観となると考へることができる。イデアの直観と考へられるものは自己自身を限定する無数の今そのものを包むといふ絶対無そのもののノエマ的限定の意義に於て考へられるのである。場所の限定として即ち「於てあるもの」として行為的自己即ち人は各自に各自の現在を有し、行為によつて自己自身の内容を見るかぎり即ち自覚するかぎり、永遠の今の内容としてイデアを見るのである。

三

私の絶対無の自覚的限定といふものは一般者の自己限定の根抵として、すべての一般者を越えて之を包むと云つても、私はそれによつて単にプロチノスの一者の如きものを意味するのではない。従つて私の無の自覚といふのは唯宗教的エクスタシスの如きものを云ふのではない。働くものを越えて之を見ると云つても単なる知的直観といふ如きものを意味するのではない。私の絶対無の自覚といふのはプロチノスの一者の如く主語的方向に考へられたものではない、有にして自己自身を限定するものではなく、無にして自己自身を限定するものを意味するのである、イデア的限定の意味を有つたものではなくして、却つて質料的限定の意味を有つたものである。又直観と云つても、それはシェリングの「同一」の如き意味に於て主客合一を意味するのではない、ノエシスの中にノエマが没入することを意味するのである。自己の中に自己を見るといふことを自覚と考へることによつて斯く云ひ得ると思ふのである。直観とは固自覚を意味するものでなければならない、単に見るものも見られるものもなくなるといふ意味ではない。私の絶対無の自覚といふのは無論宗教的体験の意義を有つたものである、それは最も深い意味に於て宗教的体験の事実といふことができる。併しそれが為に我々の実在的知識と無関係ではない、ケルケゴールのパラドックスといふ如きものは、それは深い宗教的事実なると共に、我々の客観的知識と考へるものの根抵も此にあると考へざるを得ない。宗教は事実の底に考へられるものでなければならない。歴史の底に考へられるものでなければならない。かういふ意味に

於ては宗教は芸術的直観と反対の立場に立つと云ふことができる、所謂エクスタシスといふ如きものは宗教の本質ではない。大乘仏教の真意は事実の底に徹することではなければならぬ、一步一步真実に触れると云ふことでなければならぬ。私は屢形あるものは形なきものの影といふも、それは有の限定に対する無の限定を意味するのであつて、真に無にして自己自身を限定するものに於ては、影は即真有でなければならぬ、一步一步が絶対の真でなければならぬ。故に無にして自己自身を限定するものといふものが考へられるならば、それは弁証法的運動の意義を有つて来なければならぬ。矛盾を包む一般概念がないと考へられるが、而も矛盾といふものが考へられる以上、無にして自己自身を限定する一般者の自己限定として考へられると云はざるを得ない。限定せられた一般者に於てあるものは自己自身に矛盾するものではない、自己自身に矛盾するものに於ては、逆に特殊が一般を限定するといふことができる、ヘーゲルの如く個物が一般者といふことができる。併し個物が一般者であるといふのは尚真の弁証法の意義を明にするものでない、真の弁証法に於ては、現実が即無でなければならぬ、感官的なるものに弁証法の意味があるのである。かゝる意味に於ては、私の絶対無の自覚といふのはシェリングの知的直観といふ如きものではなくして、却つてヘーゲルの弁証法的意義を有つと云ふことができる。唯ヘーゲルの弁証法といふのはイデアの弁証法、即ち有の弁証法であつて、非合理的なるものの合理化としての真の無の弁証法ではない、ヘーゲルの如く根柢に理性を置くならば理性の好策といふ如きものが出て来やうがない。、私は真の弁証法は過程の弁証法ではなくして、存在の弁証法でなければならぬと思ふ。弁証法的運動の背後に何等かの意味に於て対象的連続が考へられるならば、それは弁証法的運動といふものではない、それは一つの目的的發展に過ぎない。有即無、生即死の過程といつても、それは尚ノエマ的限定の意義を脱却することはできない、従つて尚対象的に自覚するものが考へられて居なければならぬ、尚真の無の限定とは云へない。之に反し真に自己自身に矛盾するものは、存在そのものが矛盾でなければならぬ、有ることそのことが矛盾でなければならぬ、例へば我々の意志の如きもの、行為の如きもの、否自己自身といふものがかゝる自己矛盾的存在であるのである。かゝる意味に於ては我々の自己の核ともいふべき感官的なるものが、非合理的なるものの合理化として最も深い意味に於ての自己矛盾と考ふべきものである。この意味に於て肉そのものが罪惡であり而も自己の存在はそこにあるのである。此の如き存在そのものが自己矛盾といふべきものを限定するものは、絶対に無にして自己自身を限定する私の所謂絶対無の自覚的限定といふものでなければならぬ。そこには断絶の連続といふ如きものがなければならぬ、ヘーゲルのイデア的弁証法は尚過程的弁証法に過ぎなかつたと思ふ。対象的にノエシス即ノエマとして過程的自己といふものを考へる論理の領域に於ては、ヘーゲルの如き弁証法的限定を考へ得るで

あらう、併し現在の世界に於てはかゝる弁証法は当嵌まらない、ヘーゲルの弁証法は事実には撞着して破壊せざるを得なかつた所以である。それは弁証法そのものの罪ではなくして、ヘーゲル自身が真に弁証法の本質を掴み得なかつた故であると思ふ。私の考を以てすればヘーゲルの弁証法的論理の背後にも実は無のノエシスの限定といふものが働いて居るのである、止揚せられる場合、いつも存在の矛盾の意味があるのである。真の弁証法的運動は思惟の弁証法でなくして行為の弁証法でなければならない。

私はノエマ的限定としての判断的一般者とノエシスの限定としての自覚的一般者とを包み、之を基礎付ける意義を有する具体的一般者として行為的一般者といふものを考へた。行為的自己といふのは無にして自己自身を限定すると考へられるものである。併し行為的自己といふのは尚限定せられた自己、見られた自己たるを免れない、行為的自己の奥底に真に無にして自己自身を限定するものがなければならない、即ち絶対無の自覚といふ如きものがなければならない、行為的自己もそれによつて限定せられるのである。判断的一般者の限定の内容として、我々の行為的自己に対立して考へられる所謂客観界といふ如きものは、絶対に無にして自己自身を限定するもののノエマ的限定の内容の意義を有つたものでなければならない。此故に我々の行為そのものが歴史によつて限定せられると考へられるのである。然らば此の如き絶対無の自覚的限定といふのは如何なるものであるか、すべての一般者の自己限定の根柢として、真のヒポケーメノン限定する一般者の自己限定とは如何なるものであるか。私は従来、私の所謂一般者の自己限定と時との関係について多く論ぜなかつたが、時といふものが考へられる以上、それはやはり一般者の自己限定として考へられねばならない。時といふものも何等かの意味に於てその両端が結び附いて居ると考へられねばならない、然らざれば時といふものも考へられないのである。併しその両端がノエマ的に結合すると考へられるかぎり、それは時といふものではない、円形を成すものは時ではない、一つの直線が無限の両端に於て合一すると云つてもそれはもはや時ではない。時の無限なる両方向の結合と考へられるものは、現在が現在自身を限定する所にあるのである、方向の無限の果にあるのではなく方向の出立点にあるのである、限定するものと限定せられるものが一であるといふ矛盾の統一に於てあるのである。故に時に於て限定せられたものは唯一的でなければならない、過去は永遠に過去である、時の現在も直線の一点ではない、単なる同一ではなくして、唯一の方向でなければならない。此の如き時の自己限定と考へられるものは無にして自己自身を限定するものの自己限定と云はねばならない、私の所謂場所自身の自己限定として時といふものが考へられるのである。かういふ意味に於て、私は最後の場所的限定として永遠の今の自己限定といふものを絶対無の自覚的限定と考へるのである。永遠と時との関係については、プラトンのティマイオスに

於ての如く永遠といふものが時の始であり終であり、時は永遠の影と考へることもできるであらう。併し此の如き意味に考へられた永遠といふのは、時を超越したもの、否寧ろ時を失つたものとして、何等の働きを有たないものである。若しそれを時といふならば、何処も現在たると共に、現在の無い時といふべきである。真の永遠といふべきものは、之に反し私の永遠の今の自己限定といふ如きものでなければならぬと思ふ。マイステル・エックハルトは「充実について」Von der Erfüllungに於て、時の充実といふことはもはや時がなくなつた時と考へることもできるが永遠の今と考へることができる、無限の過去を現在の今に収斂するのが時の充実であると云つて居る。神は創造の始の日の如く今も創造しつゝあるのである、ティマイオスの永遠といふ如きものは、自己自身を限定する現在から、ノエマ的方向の極限に考へられたものたるに過ぎない。真の永遠はノエシス的限定の底に考へられねばならない、今が今自身を限定するといふ所に真の永遠の意味があるのである。絶対無の自己限定としてそこに何物もない、過去もなければ未来もない、磨き澄ました明鏡の如く永遠に新である、そこにいつでも時が始まるといふ所に真の永遠の意味があるのである。絶対無の場所に於ては到る所が今であり、到る所に時が始まるのである。かゝる意味に於て絶対無の場所的限定として絶対無の場所に於てあるものと考へられるものが、我々の自由なる自己と考へられるものである。各人は各人の内に無の鏡を有し、否無の鏡に於てあり、自己自身を限定する今として、即ち瞬間として自由なのである。瞬間は時に於てあるのではなく、その外にあるのである、プラトンも既に「パルメニデス」156Cに於て瞬間το εξαίφνηςは時に属せずして、動と静との間に位し、そこから動が静に變じ静が動に變ずると云つて居る。私は此に於てケルケゴールが「不安の概念」の第三章の始に於て云つて居る如き考に同感せざるを得ないのである。以上述べた如くなるを以て私の絶対無の自覚的限定と考へるものは永遠の今の自己限定といふべく、かゝる限定によつて無数に自由なる自己、即自己自身を限定する今が限定せられる。而してかゝる自己自身を限定する今の内容として事実といふものが限定せられるのである(それは人格的にして原始的歴史の事実ともいふべきものである)。かゝる意味に於て事実が事実自身を限定する事実的内容と考へられるものが、時の充実と考へられる方向に於て、それが永遠の今の内容、即ち永遠の自己の内容としてイデアと考へられる。かゝる方向に於て遂に時の内容を失うて、単なる意味の世界といふ如きものも考へられるのである。自己自身を限定する単なる事実そのものと考へられるものは、いつも新たに、いつも始まる時の内容として固、断続的でなければならぬ、我々の人格的統一と考へられるものは非連続の連続である、そこに自由の意味があるのである。かゝる人格的統一を通して事実的内容と考へらるゝものがイデア的意義を有つて来る、イデア的内容が我々の行為的自己の自覚的内容と考へられる所以である。斯く非合理的に自己自

身を限定する無の自覚的限定を基礎とする点に於て、私はヘーゲルの考よりも寧ろシェリングの後期の考に近いと云つてよい。唯シェリングには論理的基礎附が十分でない、知的直観の立場から後期の如き考を基礎附けることは不可能であつたのである。

それでは、私の絶対無の自覚的限定といふものとカントの所謂意識一般とは如何なる關係に立つであらうか。私の絶対無の自覚的限定といふのはケルケゴールのパラドックスといふ如き意味に於て深い宗教的意義を有するのは云ふまでもない。併し私はそれが宗教的意義を有すると共に、事実が事実自身を限定するといふ意味に於て我々の知識成立の根抵となると考へるのである。我々の知識はそこから始まると云つてよいと思ふのである、所謂自然とはかゝる事実的内容が思惟によつてイデヤ化せられたものたるに過ぎない。カントの意識一般と考へられるものは私の絶対無のノエマ的自覚といふ如き意味を有つたものでなければならない。絶対無の自覚的限定を永遠の今の自己限定として考ふるならば、そのノエシ的自覚の方向に於ては無数の今、無数の自己が限定せられると考へねばならぬと共に、そのノエマ的自覚の意味に於ては一つの今として限定せられなければならない。ノエシ的限定の意義に於て無数の今、無数の自己と考へられるものは、ノエマ的自覚の方向に於て一つの今、一つの自己に触れなければならない。かゝる意味に於ける一つの今の自己限定といふものがカントの意識一般的自己と考ふべきものであらう。そこに我々の内的事実が外的事実に接すると考へられるのである。そこで私はカントの意識一般的自己を思惟の方に於てよりも、寧ろ内的感官の方に於て見たいと思ふのである。内的感官の意義を有する我々の自己が自己自身を超越すると考へられる所に、意識一般的自己の意義があるのである。斯く我々の内的自己が自己自身を超越するといふことは、永遠の今が一つの今として自己自身を限定するといふことに外ならない。カントが私の表象に伴ふ「私が考へる」といふことは、かゝる自覚の事実を意味するものでなければならない。永遠の今の自己限定の立場に於て、その永遠不変にして時が時自身を否定すると考へられる方向に見られるものは、広義に於て表現の内容と考へられるものでなければならない。

現在を有せざるものは、時の充実の方向に考へられるイデヤ的内容といへども、既に事実的ではない、実在ではない。況して時が時自身を否定する方向に於て全く時の意義が失はれたと考へられる時、単なる意味の世界といふ如きものが見られなければならない、自覚を失つた時の世界は単なる了解の世界と考ふべきであらう。かゝる方向から逆に時が時自身を限定する方向に於て、今の自己限定に接する点に於て、即ち時の自覚に接する点に於て、我々の思惟内容の世界と考へるものが見られるのである。即ち思惟の内容とは了解の自覚的内容であり、表現の自覚的内容が真理と考へられるものであらう。思惟といふのは既に一種の行為の意味を有つたものである、その自己限定の内容は既にイ

デヤと考へらるべき意味を有つたものである。数の世界といふ如きものは斯く考へられるものであるが、意識一般とは事実自身を限定する瞬間的今として、かゝる思惟的限定をも之を含み之を基礎附ける意味を有つてみなければならぬ。非合理的なるものの合理化として、限定するものとせられるものとが一つとなる所から思惟が始まるのである、自己自身を限定する今に於て、今が今を失ふといふ点に於て単なる思惟が成立するのである、限定せられた一般者の自己限定に過ぎない。故に私は意識一般の本質を思惟の方に置かないで寧ろ内的感官の方に置くと云ふのである。今が今自身を失ふといふのではなく、永遠の今そのものがそのノエマ的自覚の意味に於て一つの今として自己自身を限定する所に、意識一般といふ如きものが考へられるのである。故に真に知識成立の根柢として意識一般と考へられるものは原始歴史的な主観といふ如きものでなければならぬ。カントの意識一般と考へたものはその一つの特殊なる形に過ぎない。瞬間的今の能限定意義を極小とすることによつて、所謂対象認識の主観といふ如きものが考へられるのである。カントの内的感官といふのは要するに自己の意識内容を対象的に見る尚一種の外的感官であつて、働く自己そのものの内容を見るサンチマンといふ如きものでない。従つて時といふ如きものも対象認識の図式といふ如き役目を演ずるに過ぎない。かゝる考を徹底すれば、内的といふ意味もなくなり、時も真の時といふものではなくなると思ふ。之に反し、私は非合理的なるものの合理化として感官といふものに、内外の別あるのではなく、所謂外的感官と考へられるものを内的感官のノエマ的極限と見るのである、瞬間的今を極小にした意味に於てカント哲学に於ける時の如きものが考へられるのである。真の認識主観といふべきものは、カントの意識一般よりも一層根本的に、一層具体的なものでなければならぬ。カントの意識一般といふ如きものは厳密なる意味に於て自然界認識の主観たるを免れない。私の所謂絶対無の自覚的限定として今が今を限定する瞬間的限定に於て、私の所謂原始歴史の事実といふ如きものが限定せられ、その現在的限定の意義を極小にすることによつて自然界といふ如きものが構成せられるのである。自然が歴史に於てあるといふことの真の意義はかゝる意味に於てでなければならぬ、所謂歴史に於て自然があるのではない、所謂歴史とは自然と同じくかゝる原始的事実から構成せられたものである。私の絶対無の自覚的限定から、瞬間的今の限定の意義を如何に考へるかによつて、所謂歴史といふものも考へることができれば、所謂自然といふものも考へることができるのである。自然認識を主としたカントの意識一般といふ如きものに、歴史認識をも含めるのは困難であらう。反省的判断の限定といつても、固カント哲学の如き認識の立場から如何にして反省といふ如きものが可能なるかが明でない。かゝる立場からしては、要するに歴史は不完全なる自然と考へられる外はない。私の絶対無の自覚的限定の立場からは、独りカントの意識一般の如き立場をその特殊なる場合と考へ得るのみならず、フ

フッサールの純我の直観と考へられるものや、ハイデッゲルの了解の立場の如きものも含めることができると思ふ。無の自覚的限定として今が今自身を限定するといふ意味に於て、云はば広義に於ける行為的自己の自己限定の意味に於て、原始歴史の事実といふものが限定せられるが、限定する今が限定せられる今に合した時、即ちノエシスの限定の意義が極小となつた時、カントの意識一般の対象界といふ如きものが限定せられる。それは永遠に新なる時の世界ではなく、永遠不変なる時の世界である、永遠の中に現在を没した時の世界である、即ち述語面の中に主語的なるものを没した、限定せられた一般者の世界である。フッサールの純粹自己の直観と考へられるものは之と異なり、今が今を限定すると云つても、それは過去も未来もない今である。従つてそれは今といふものでもない、現象学的時といふ如きものは時ではない。かゝる立場からは唯本質といふ如きものが限定せられるのみである、主語面と合一した述語面的限定の内容といふことができるであらう。ハイデッゲルの了解といふのは一種の行為的限定と考へることができるが、それは自覚を失つた行為である、了解の世界といふのは現在を有せない単に可能なる時の世界たるに過ぎない。それは単なる述語面の自己限定の世界といふべきであらう、一般者の主語的限定を判断とすればその単なる述語面的自己限定は了解といふ如きものと考へられるであらう、而して述語面が主語的に限定するのが所謂直観と考へることができる。此等はすべて自己に於て自己を見るといふ私の無の自覚の種々なる場合として考へることができる、従つてすべての知識の根柢に自己自身を限定する事実そのものといふ如きものがあると思ふ。対象認識といふ前に、先づ事実的知識といふものがなければならぬのは云ふまでもなく、所謂ザッへも意識のタートザッへでなければならぬ。我々の行為的自己が単なる意識的自己と考へられる時、タートザッへは単にザッへとなるのである、ザッへはタートザッへのタートを極小にしたものである。「ザッへそのものへ」といふ代りに私は「タートザッへそのものへ」と云ひたいと思ふのである。カントの意識一般はフィヒテの我やシェリングの知的直観に於ては形而上学に陥つたとは云へ、ヘーゲルの弁証法に於ては私の所謂無の自覚に近づいたと云ふことができる。唯それはイデアの弁証法としてノエマ的なる無の自覚に過ぎなかつたのである。

知識は何処に始まるか、知識の根柢は何処にあるか、又単なる科学的知識と哲学的知識との区別は何処にあるか。私は我々の知識と考へられるものは、無の自覚的内容として事実といふものから始まると思ふ。見るものなくして見るといふ私の無の自覚といふのは、単なる知的直観の如き意味に解せられ、その内容と考へられるものは単に芸術的直観の内容の如くにして、概念的知識と何等の関係なきものと考へられるかも知れない。併し知的直観と考へられるものはノエマ的に限定せられた無の自覚といふ如きものであつて、私の所謂絶対無の自覚的限定といふものではない。絶

対無の自覚として今が今自身を限定する瞬間的今の内容といふものは、事実そのものといふ如きものでなければならぬ。ノエシス的にそれが宗教的意義を有すると共に、ノエマ的にすべての知識の根柢となると考へられるものである。私が事実そのものといふのは、既にリッケルトの所謂所与の範疇といふ如きものに当嵌まつたものを云ふのではない、「彼花が赤い」とか「此鳥が飛んだ」とかいふ如き所謂知覚的事実といふ如きものを意味するのではない。それ等は既に性質とか働きとかいふ範疇に当嵌まつたものである、既に構成せられたものである、蕾に此等の範疇に当嵌まつたものを意味せないのみならず、何時何処といふ如く既に限定せられた時間空間の形式に当嵌まつたものを意味するものでもない、非人格的命題の内容といへどもはや対象化せられたものたるを免れない。私は此に於てデカルトと共に先づすべての対象認識を疑はなければならない、すべての対象認識を否定せなければならない、而して疑ふに疑ふことのできないのはコギト・エルゴ・スムだといふの外はない。疑ふには疑ふ我がなければならぬ、夢みるには夢みる我がなければならぬ、併しその「有る」といふことが主語的有の意義を有するかぎり、それは亦疑はれるものでなければならない。それは主語的に对象的に無でなければならぬ、単に見られないと云ふのではなく、無と云はなければならない。而も疑ふには疑ふ自己がなければならぬ、否定するには否定する自己がなければならぬ、自己自身の存在を疑ふことその事が自己矛盾でなければならぬ。かゝる意味に於て無にして自己自身を限定する自己の自己限定といふことは唯私の所謂場所の自己限定としてのみ考へ得ると思ふ。自己の存在といふことは場所が場所自身を限定することではなければならぬ、而して私が事実が事実を限定するといふのはかゝる限定を意味するに外ならない。自己自身を限定する瞬間的今の自己限定として、此にかゝる事実があるといふことである。「此鳥」が飛ぶといふのではなく、「此鳥が飛ぶ」といふ事実があるといふことである。未だ所謂時間空間の意味に於て、此時此場所といふのもない、私の所謂今の自己限定から所謂時間空間が限定せられるのである。まだ「此鳥」として言表の内容が外に考へられて居るのでもなければ、此事実を見て居る「私」といふものが内に考へられて居るのでもない。唯かゝる命題によつて言表せられる事実そのものが、自己自身を限定する今の内容として自己自身を見て居るのである。かゝる事実を見て居る所謂私といふものも、かゝる事実に即して限定せられるのである。私の所謂事実そのものがあるといふのは主観に於てあるのでもなく、客観に於てあると云ふのでもなく、永遠の今の自己限定の内容として、直に自己自身を見、自己自身を言表する意味に於てあるのである(原始歴史の事実である)。主客対立以前のものから出立する意味に於てハイデッゲルの存在と相類するかも知れないが、ハイデッゲルの存在は事実に自己自身を見るものではない、了解とは不完全なる自覚であり、所謂言表とは自己を失つたものの働きである。真の自己は単に自己を

了解するものでなく、働きによつて自己自身を事実的に知るものでなければならぬ。然らばと云つて私の無の自覚といふのはベルグソンの直観の如きものを意味するのでもない。ベルグソンの純粹持続といふのは単に流れる時であり、自己自身の中に自己を限定する現在を有たない時である、従つてその内容は芸術的イデヤの意義を脱することはできない。私の自己自身を限定する今といふのは純粹持続をも否定するものである、所謂時と共に無限に流れ去るものでなくして、所謂時を見るものである、それは永遠に新にして「時」がそこに始まるものである。カント学派の人々は批評哲学は知識があるといふことから始まると云ふが、かゝる事実を限定するものは固、私の所謂永遠の今といふ如きものでなければならぬ。一般的真理と考へられるものも、個別的事実の如くに私の所謂永遠の今の自己限定の内容として限定せられるのである、私の所謂原始的歴史の事実の意義を有するのである、此意味に於てすべて真理は「有るもの」である。瞬間的今の自己限定の内容として誤謬も「有るもの」でなければならぬ、唯それは不変なる時の内容として無数の瞬間的今即ち各人に対して超越的ではない、即ち各人に普遍的ではない。之に反し誤謬も各人に於ては各人そのものの自覚的内容を現す事実的真理でなければならない。一般妥当的といふことが何人も認めねばならないといふことを意味するならば、それは永遠の今の自己限定として事実的といふことに外ならない。かゝる意味に於てノエマ的に限定せられた一般的今の自己限定として一般的真理といふ如きものから、瞬間的今の自己限定として個別的事実の真理といふ如きものも一樣に一般妥当的といふことができる。右の如く考へ得るならば、フッセルの現象学に於ける純我の本質直観といふ如きことも内在的意識の事実を見るといふ意味に於て真理といふことができる、ザッへは意識に於けるタートザッへでなければならぬ。更にハイデッゲルの根本的存在学といふ如きものに至つては私の所謂今の限定の立場に立つと考へることもできるが、知る我は単に了解する我ではなく、存在は未だ事実ではない。知るといふことには働くといふ意味がなければならぬ、そこに事実が事実自身を限定する意味があるのである。ハイデッゲルの解釈学的現象学といふ如きものも、了解を一種の行為と見做し、従つて存在を了解の事実と見做すことによつて、了解的自己が自己自身の事実を見ると解し得るものと思ふ。ボルツァーノとブレンターノとを背景に有つと考へられるフッセルの現象学に於ては、意識の考が抽象的であり、客観的に真理が真理自身を限定する所以のものが明でない様に思はれる。意識の根本的性質が志向的と考へられ、真理は単に静的にして直観せられるものと考へられて居る。ハイデッゲルに於てはフッセルの内在的意識の立場を越えて一層具体的なる立場に立つて居ることを認め得るがその了解といふ立場は何処までも抽象的なるものから具体的なるものを見るといふことを免れない。無論、それが学問的立場と考へられるかも知らぬが、抽象的なるものから具体的なるものを見て行くといふ行き方は何処までも

記載とか分類とかいふ如き立場を出ることができない、原理のない学問といふの外はない(無論、現象学者はさう考へ居るのであらうが)。私の自己自身を限定する事実そのものといふものも、ハイデッゲルから云へば存在の類に属するものであつて、存在にアイゲントリッヒといふ如き種差を加へることによつて考へられるかも知れない。併し私は無限に種差を加へても一般的なるものから個物的なるものは出て来ない如く、存在が私の所謂事実そのものに達することはないではないかと思ふ。知るといふことが情知といふ如きものによつて予備せられるとしても、後者より前者へは一種の超越がなければならぬと考へるのである。一般妥当性を要求する当為の意義を有つた知識は、行為の意義を有つた自覚的内容の意義を有つたものでなければならぬ、そこには無にして見る自己の自己限定の内容として事実が事実自身を限定するといふ意味がなければならぬ。上にも云つた如くハイデッゲルの了解も、フッサールの純我の直観も、実はかゝる意義を有することによつて現象学といふ学問が成立して居るのであると思ふ。かういふ意味に於てはフヒテが「全知識学の基礎」の始に當つて、すべての意識の根柢に事行があるといふに同意を表せざるを得ない。唯フヒテはそれを無にして見る自己の自己限定と考へる代りに、直にノエマ的方向に自己といふものを考へた、爾考へることによつて彼は形而上学に陥つたのである。我々の客観的知識の根柢は実験によつて事実そのものに触れる所になければならぬ、而して実験といふのは行為的自己の自覚の意義を有つたものでなければならぬ。物理学者が実験によつて所謂外的感覚の事実に触れる如く、深い意味に於ける内的感官によつて原始的事実に触れる所に真の知識の根柢があるのである。今日の現象学に比すれば、カント哲学は尚かゝる意義を有つたものと思ふ。此故にその意識一般は綜合統一の主観として、キッド・ファクティとキッド・ユリスとを分つことができる。唯カントは数学及び純粹物理学の可能の問題を眼前に置いて居たので、その考が対象認識の成立にのみ局限せられ、深い且つ広い意味に於て知識成立の根柢が明にせられなかつたと思ふ。

私はデカルトと共に知識の根柢をコギト・エルゴ・スムに求め、知識はそこから始まると考へたいと思ふものである。かゝる意味に於ての私が考へる内容が真であらうが偽であらうが、私が考へるといふことは真であり、内的事実も此に於て考へられ外的事実も此に於て考へられるのである。そこには未だ主客の分裂はない、否主客の対立も此に於て考へられるのである。デカルトは之を主語的方向に本体と考へることによつてすぐ形而上学に陥つたが、かゝる自覚の事実は固、表現的自己の自己限定の意義を有つてゐなければならぬ、広義に於ける行為的自己の自己限定の意義を有つてゐなければならぬ、否、絶対無の自覚の意義を有つて居るのである。「スム」といふのは所謂実体と

いふ如くに主語的有として有るといふことではなく、場所自身の自己限定の意味に於て有るといふことでなければならぬ、瞬間的今が今自身を限定するといふことでなければならぬ。斯くして誤謬もその内容となると云ふことができるのである、否、自己自身の無といふことも之によつて考へられるのである。而もそれは単に自己自身を表現し自己自身を了解するハイデッゲルの存在といふ如きものでなく、働くことによつて自己自身を見るものでなければならぬ。私といふものは「そこに」あるものでなく「こ」にあるものでなければならぬ、此処から其処が見られるのである。永遠の今の自己限定として永遠なるものに触れる所に、自己があるのである。自己のある所、そこが今であり、此処である、現在から過去未来が見られ、此処から其処、彼処が見られるのである。或は現在は掴まれないもの、此処は見られないものと云ふでもあらう。併し単なる其処から此処は考へられない、過去から現在は考へられない、否、現在といふものがなければ時といふものがなく、此処といふものがなければ方角といふものはない。現在を掴み、此処を見るといふことは矛盾と云はれるであらう、併しかゝる矛盾を掴むのが自覚である、そこに實在の根柢があるのである、そこに真に具体的なるものを見るのである。単なる科学の立場と哲学の立場との区別は此になければならぬ。限定せられたものより限定するものを見て行くのが、科学の立場であり、限定するものから限定せられるものを見るのが哲学の立場と考へることができる、内から外を見るのである、具体的なるものから抽象的なるものを見るのである。かゝる立場が知識として不可能であるといふならば、私は哲学といふものを否定するの外ないと思ふ。併し自己自身の矛盾を見る、否、矛盾そのものを自己と見る自覚の事実は外から之に達すべきものではなく、而もすべての知識は此に基礎附けられて居るのである。私は古来真の哲学と考へられるものは皆かゝる自覚の立場に立つて居ると思ふ、私の所謂無の自覚の立場によつて成立して居るとすら思ふのである。唯自覚の真意義が明にせられないかぎり、無の自覚的限定は単にノエマ的に形而上学的実体と考へられるの外はない。古来哲学が形而上学的であつたといふことは哲学そのものの已むを得ざる宿命であつたとも考へることができる。我々の自覚はノエマ的限定として考へられるのではなくノエシシ的限定として考へらるべきものである、其処から此処が見られるのではなく、此処から其処が見られるのである。斯く無にして見るといふことが行為的自覚といふことであり、行為なくして自覚といふものなく、自覚なくして哲学といふものもない。哲学の根柢には行為的自己の自覚といふものがなければならぬ。所謂形而上学と考へられるものは行為的自己の自覚的内容として、それ自身の意義を有するものと考へ得るであらう、斯くして空想的と云はれる形而上学も、科学以上に人生に深い意義を有つたものと云はねばならない。知識の領域を明にすることによつて、形而上学を知識の領域から駆逐したカントの批評哲学は、かういふ意味に於て、却つて哲学として無の

自覚の意義に達したものと考へることができる。デカルトのコギトはカントに於て我々の表象に伴ふ綜合統一の認識主観となつた。それはスムとして主語的に考へられる実体といふ如きものではなく、ノエマ的には絶対に無にして唯ノエシ的に自己自身を限定する私の所謂無の自覚といふ如きものでなければならない。そこに無にして見るといふ意味がなければならない、上に云つた如く真の意識一般は内的感官の底に考へられねばならない。併し斯くカントの批評哲学がデカルトの形而上学に反し無の自覚の立場に立つたと考へ得るとしても、それは尚無のノエマ的自覚の立場であつて、真のノエシ的自覚の立場と云ふことはできない。カント哲学に於てその根柢となる意識一般的自己の自己といふ意義が明でない、スムといふ意味が明でない。無論、デカルトの意味に於てスムといふことはカントの認識論を形而上学化することであらう。併し私の所謂場所が場所自身を限定する意味に於て無の自覚としてスムといふことがなければ、意識一般といふ如きものは無意義といふの外なくカントの認識論は単なる対象論となるの外ないであらう。然らざれば、それは単に無内容なる形式論理的主観としてカントの考へた如き客観的認識主観の意義を有つことはできない、感官的なるものと結合することによつて客観的認識の主観となるには、感官的としてスムの意味がなければならない。固、数学及び純粋物理学が如何にして可能なるかを問題としたカントは、対象認識の意義を明にしたが、批評哲学そのものの知識成立の意義を考へなかつた。我々の知識はスムとして私が私自身を限定することから始まるのである、我々の知識は対象認識から始まるのではなく、場所自身の自己限定の内容として事実といふものから始まるものである。真に事実そのものと考へられるものは、自己自身を限定する今そのもの内容として、主客未分以前の表現的内容の意義を有つて居る。デカルトのスムは単に内部知覚の底に考へらるべきものでなく、之を越えた表現的自己の自覚の意味でなければならない。かういふ意味に於ては私はハイデッゲルの如き存在から知識を見る見方に同意を表すものであると共に上に云つた如く其処から此処を見るのではなく、此処から其処を見るのである。我は物に托して見られるのではなく、我は現実に於て我自身を見るのである、物に托して見られると考へられるものは真の私でない。私は却つてロゴス自身の自覚といふべきヘーゲルの弁証法に於て私の所謂無の自覚の意義を見るのである、無の自己限定といふ意味に於て真の弁証法といふものが明にせられると考へるのである。フィヒテやシェリングに於てノエマ的方向に行つた無の自覚は、ヘーゲルに於てそのノエシ的限定の立場に還つたと考へることもできる。カントの純粹自己は何処までも内部知覚的自己の底に考へられた内部知覚的自己の極限といふ意義を脱しないが、ヘーゲルに至つては全く之を越えて却つて外から内を見るときも云ふべき無の自覚の立場に立つて居ると考へることができる。併しヘーゲルの弁証法といへども未だ真に私の所謂無の自覚のノエシ的限定の意義を有つたものでない。

それがイデアの弁証法であり、過程的弁証法であるかぎり、尚無のノエマ的自覚の意義を脱し得ない、ヘーゲル哲学が形而上学を脱することのできなかつた所以である。ヘーゲルの弁証法からはスムは出て来ない、ヘーゲルの哲学に於ては結局個人の自由意志といふ如きものは否定せられなければならない。理性、アウグスチヌスに問ふ、汝は汝自身のあることを知るか、曰く知る、如何にして知るか、曰く知らない、といふ如くスムは理智的に知ることはできない。永遠に老いない、永遠に新なる、何処でも始まる今の自己限定としてスムといふことができ、そこに行為的意義に於て事実が事実自身を限定するのである。故に感官的なるものによつてスムが限定せられ、非合理的なるものの合理化として、無の自覚のノエシス的限定には存在的弁証法の意義があると云ふことができる。かういふ意味に於て私はデカルトのコギトをデカルト自身の考へた方向よりはパスカルのサンチマンの方向に考へることによつて、真の自覚の意義を明にし得ると思ふ、そしてそこに真に知識の基礎があると考へるのである。唯サンチマンの哲学は何処までも内から見て居るのである、之を越えて之を包むといふ無の自覚の意義即ち行為的自覚の意義に達してゐない、主観的と考へられる所以である。我々の真の知識は行為的自覚の意味に於てスムが限定せられることによつて限定せられるのである。知識には何等かの意味に於て永遠の或物に触れるといふことがなければならぬ、行為の意味に於て見るといふことがなければならぬ。而して斯くすべての知識といふものが広義に於ける行為的自己の自己限定の意義を有すると考へられねばならぬと共に、知識自身の自省といふべき哲学の立場は最も深い意味に於て行為的自己自身の自省の立場の意味を有つてゐなければならない、絶対無そのものの自覚の意味を有つてゐなければならない、永遠なるものの自覚と云つてよい。スムとして無にして見る自己が自己自身を限定する自己限定のノエマ的方向に所謂認識対象界が見られ、そのノエシス的方向に所謂意識界が見られるとすれば、かゝる自己が自己に於て自己を見る自覚的立場に於て哲学が成立するのである。無なる自己が自己自身の姿を映して見るといふ所から哲学といふものが始まるのである。単にスムとして自己が尚自己を見ない問は、何処までも単なる科学的立場たるを免れない。哲学は思弁的と云はれるが、哲学は単なる理論的要求から起るのではなく、行為的自己が自己自身を見る所から始まるのである、内的生命の自覚なくして哲学といふべきものはない、そこに哲学の独自の立場と知識内容とがあるのである。かゝる意味に於て私は人生問題といふものが哲学の問題の一つではなく、寧ろ哲学そのものの問題であるとすら思ふのである。行為的自己の悩、そこに哲学の真の動機があるのである。哲学を理論的要求の上に置いたと考へられるアリストテレスの哲学の背後に、プラトンのイデアの哲学のあることを忘れてはならない、希臘人には見ることは最高の意味に於て生きることであつたのである。カントの批評哲学といふ如きものといへども、私はその根抵に深い行為的自己

の自覚の意味があることを思はざるを得ない。カント学者は対象認識の可能と性質を明にしたであらうが、批評哲学そのものの可能と性質とについては何等の論ずる所もない。批評哲学そのものも知識であり、而もそれが対象認識と同一視することのできない知識であるかぎり、別にその成立と可能とが明にせられなければならない。私は理性自身の自覚即ち当為的意識自身の自覚を無の自覚と考へることによつて之を明にし得ると思ふ。当為の意識とはスムとして無の自覚が自己自身を限定するより起るのである、斯く限定せられた自己が無にして自己自身を限定する行為的自己として、イデヤ的に自己自身の内容を見ようとするのが所謂当為の意識である、瞬間的今の自己限定に対して一般的今の自己限定といふことができる。私はかういふ意味に於てカントの批評哲学の意義を却つて実践理性批評の方に見ようと思ふ。カント哲学に於ける私の所謂スムに基くものを除去して、リッケルトの如くカント哲学を形式主義的に解すれば、論理的に哲学は簡明となるかも知れないが、それと共に真に哲学と考へられるものの意義が失はれるであらう。スムといふことそのことが所謂科学的知識に対して形而上学的事実であるのである。人は形而上学的動物である、そこに哲学的問題の起源があり、そこに哲学的問題の解決がなければならない。存在といふものから自己を見るといふ解釈学的現象学といふ如きも、それは科学的であるかも知れないが、哲学的とは考へられない。哲学は何処までも科学とはならない、厳密なる意味に於て哲学が科学となつた時、それは哲学ではなくなるであらう。カントは所謂形而上学を否定した、併しカントの批評折、学は科学を問題としたが、その方法に於ては所謂科学的方法ではない。行為的自己の自覚の立場を離れて之を外から見る現象学的立場といふ如きものは、其根抵に於て意識の事実を見て行くといふキッド・ファクティの立場を脱せない。ハイデッゲル¹の立場といへども要するに了解の自己限定的事実を見て行くといふに過ぎない、同じくロゴスの立場に立つと云つてもヘーゲル²の如くロゴス自身の自覚の立場に立つものではない。現象学派に於ては知識の客観性を言表といふものに求めて居るが、何処までもボルツァーノ³の一致説の立場を脱して居ないと思ふ。私は現代の哲学が徒らに形而上学に陥るを恐る」のあまり、哲学自身の独自の意義と立場とについて深く省みる所がないではないかと思ふのである。